



あなたには癒しでも私には暴力：物語と最初の暴力

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 俊治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006012

あなたには癒しでも私には暴力

— 物語と最初の暴力 —

萩原 俊治

はじめに

物語とは最初の暴力である、ということについて述べてゆこう。ここで物語というのは私たちの心の中でもつれていたものを解きほぐしてくれるもののことだ。

物語の終結部あるいは大団円のことを英語やフランス語で *denouement* (もつれや結び目を解くこと)、ロシア語でも同様の意味で *razviazka* という。日本の物語では起承転結の結が大団円になるが、これももつれていたものの収まりがつくということだ。英語やフランス語の終結部とは違ったものになるが、一件落着ということでは同じことだ。いずれにせよ、物語はもつれていたものを解きほぐす。

この物語というものを広くとらえ、私たちの日常会話から理論までも物語に含めるとすれば、それはいずれも、私たちの心の中でもつれていたものを解きほぐしてくれるものだと言える。物語によってもつれを解かれた私たちは一息つき、これまでとは違った風に生きるあるいは死ぬことができかもしれないと思うようになる。¹⁾

以前私は大塚英志の、吉本ばなの小説や「ドラクエ」というゲームソフトが青少年が大人になるための一種のセラピーになっている、という意見について次のように述べた。「大塚のこのような分析は面白いが、着想そのものは特に目新しいものではない。たとえば、私たちは思い悩んでいるとき、偶然読んだ物語によって救われることがある。これはその物語に描かれた内容が自分の悩みと重なり、その物語を読み進めてゆきながら、同時に自分の悩みについても考えているからである。その悩みが物語の中で自分にも納得のゆく形で解決されるとき、私たちは救われる。これも一種の治療だろう。また、このような私的な治療を自分にではなく、他人に施すのがさまざまな心理療法だといえる。たとえば、ユング派の心理療法では、治療場面においてクライアントの語る物語がきわめて重要な意味を持つ。治療者はその物語を聞きながら、クライアントともにその物語の読みを深めてゆく。そして、その読みにクライアントが納得すれば治療は終る。要するに、吉本ばなの小説の場合は他人によって作られた物語、心理療法の場合は自分で作った物語という違いはあるにしろ、それはいずれも私たち自身についての物語であり、その物語を読むことによって私たちは癒される。」²⁾

ここで癒されるというのは、物語によって私たちの心の中でもつれていたものが解きほぐされ一息つくということだ。やはり歌、詩、小説、理論、誰かのお喋り、理屈、誰かのお説教、カウ

1) 拙稿、「物語と理論」、『英米言語文化研究』No45、大阪府立大学英米言語文化研究会、1997、pp.145-156

2) 拙稿、「閉じた物語と開いた物語—ベングソンとバフチン」、『大阪経済論集』第44巻第3号、1993、pp.108-8

ンセラーとの共同作業による物語の構築など、私たちをほっとさせてくれる言葉はすべて物語なのである。そのような物語に出会うとき私たちは救われたような気持ちになり、新しく生きる、あるいは死ぬことができかもしれないと思うようになる。

しかし、物語にはこれとは別の面がある。それは、その当人にとって癒しあるいは救いとなる物語が他のヒトにとっては暴力になってしまうということだ。そうなるのは、自分の物語にこだわるあまり他のヒトの物語に耳を傾けることができなくなるからである。また、他のヒトの物語に耳を傾ける余裕を失った者は、ともすれば自分の物語を相手に押しつけるようになる。これが私のいう最初の暴力なのである。

つまり、最初の暴力は、

- ①他のヒトの物語を聞かないこと。
- ②自分の物語を他のヒトに押しつけること。

という二つの暴力によって成立する。もっとも、①+②のケースもあれば、①のみ、あるいは②のみのケースもある。

なぜ「最初の暴力」なのかといえば、自分の物語を聞いてもらえないヒトはいきどおる。いきどおるという言葉は適切ではないのかもしれない。ヒトによれば、悲しみや無力感を感じるだけの場合もあるだろう。いずれにせよ、私たちは自分の物語を聞いてもらえないと楽しくない。ヒトによれば、この地球上でひとり取り残されたような気分になるかもしれない。この楽しくない気持は、ひそかに身体的・言語的な「二次的な暴力」を準備する。つまり、じっさいに誰かをぶったたくとか罵るとかいう行為を準備する。また、自分にその暴力を向けるヒトもいるだろう。あるいは稀に、まったく何の影響も受けない非凡なヒトもいるだろう。誰もがじっさいに暴力を自分や他のヒトに向けるわけではない。しかし、自分の物語を誰かに聞いてもらえないとき、凡庸な私たちの大半は自他に対する暴力に向かう。そしてキレル。このような身体的・言語的な暴力を準備する暴力なので「最初の暴力」と名づけるのである。

このような最初の暴力と二次的な身体的・言語的暴力の連鎖は、私たちにとって日常的なものだ。他人の言うことを聞かずに自分の意見を押しつけるヒトは多い。また日常的な出来事以外でも、そういうヒトは多い。たとえば、従軍慰安婦として連行された韓国・朝鮮の人々の話を聞かない日本人、ホロコーストの物語を認めないドイツ人、イスラエルの人々の言うことを聞かないパレスチナの人々、パレスチナの人々の言うことを聞かないイスラエルの人々など、例は無数にあげることができる。このような最初の暴力によって、さまざまな二次的暴力が引き起こされる。その中でも最悪のケースが戦争だ。

これでほぼ私が言いたいことは尽きているのだが、これだけでは私の言いたいことは読者に伝わらないかもしれない。そこで、以下で具体例をあげながら、物語そのものがセラピーであると同時に暴力でもあることについて述べてみよう。まず取りあげるのは、最初の暴力がもっとも典型的な形で現れる強迫症者のケースだ。強迫症とは他のヒトの物語に耳を傾けることができなくなる精神失調なのである。

強迫症者の物語

精神科医の中井久夫によると、重症強迫症者（重度の強迫神経症者）を同じ病室に入れておくのはきわめて危険だそうだ。入れておくと「どちらが正しいか」という点をめぐって激しい争いがおきる。この争いは一方が白旗をあげるまで止むことがない。一方の患者が争いに敗れて自殺しても、勝利した患者は凱歌をあげるだけだ。中井によれば、「相手に勝ちたい」と思うのがパラノイアで、「相手に負けまい」と思うのが強迫症者である。パラノイアが攻撃型であるのに対し、強迫症は受け身型であるともいえる。攻めのタイプは違うが、両者とも相手に勝とうとすることに違いはない。また、「勝ちたい」と思うパラノイアが、相手を見失ってひとり相撲になりがちなのに対して、強迫症者は受け身であるため当然相手がいる。強迫症者はその相手をいわば寝技に巻きこんで権力闘争を行う。蟻地獄。強迫症者の餌食になった相手は、その権力闘争から抜けだせなくなる。

中井によれば、精神の失調におちいる者のなかで、誰かを巻きこんで闘争関係に入るのは強迫症者だけだ。パラノイアを含め、強迫症以外の精神失調では、そのような事態は生じない。中井によれば、精神病院で煙たがられるのは強迫症患者ときまっている。

強迫症者の多くはお行儀がよくても、ふしぎに愛されない存在である。遠くから見たところでは必ずしもそうではないが、近くにいると必ずといってよいほどそうみなされる。だから精神科病棟でめだつことになる。「かわいげがない」というささやきが病棟関係者の中から洩れることも少なくない。「せんせい、あのいい加減に退院させてよ」といわれている患者はふしぎに強迫症が多い。はるかに手のかかりそうなヒステリーあるいは分裂病のほうが、歓迎されなくても寛容される。強迫症者が病棟で暴力をふるうことはまずないのに、病棟内の暴力の対象になることが少なくないという気の毒なことにもなる。³⁾

強迫症者に「かわいげがない」のは強迫症者が相手に「負けまい」と依怙地になってしまうからだ。中井によれば、強迫症者に巻きこまれると、強迫症者と同様つい依怙地になってしまい、「自分はイノセント（無実）だ」とか「悪いのは相手だ」などと思ってしまう。そして、強迫症者を相手に正義の闘いをしているような気分になる。また強迫症者は相手を「少し下に」見る癖があるので、さもヒトを小馬鹿にした表情になることが多い。このため、相手の憎しみをかきたてる。中井によれば、強迫症者は一般に「憎悪している人」の表情をしている。いずれにせよ、強迫症者が相手の憎しみをかきたてる条件は十分にそろっている。

強迫症は伝染する

ということになると、セクハラや家庭内暴力と言われるものの中には、強迫症者によって誘発された暴力も多いにちがいない。強迫症的な妻に夫がつい暴力をふるってしまったたり、強迫症的な女子学生に教師が思わず性的な暴言を吐いてしまったたり、また、それが原因で二人の関係がますます

3) 中井久夫、「説き語り<強迫症>」、『中井久夫著作集』第2巻、岩崎学術出版社、1985、p97

こじれ裁判にまでいたる、というような出来事も多いのではないのか。この場合、暴力をふるった社会的強者が法的に罰せられ、暴力を誘発した強迫症の社会的弱者は罰せられないだけでなく、多くの人々から同情を寄せられるということになる。もちろん私は身体的・言語的暴力をふるう乱暴者を擁護しているのではなく、暴力をふるう者がじつは強迫症者の被害者であるというケースもあるのではないかと推測しているだけだ。この場合、実際に暴力をふるっている乱暴者が最初の暴力の被害者なのである。

このようなケースは個人対集団、集団対集団のあいだでも起きているはずだ。これは推測ではなく、たとえば、強迫症的に管理しようとする教師たちに反発して、学生たちが一致団結して暴力をふるうという例は多いし、これまでしばしば起きたハーレムでの黒人暴動なども警官たちの強迫症的な管理が招いたものだった。この場合もじっさいに暴力をふるった者が罰せられることになるが、その暴力を誘発したのは、ある個人や集団によってもたらされた強迫症的な状況だった。

どうして最初の暴力が二次的な身体的・言語的な暴力を引き起こすのか。中井の臨床家としての説明では、それは強迫症が「伝染」するものであるからだ。しかし、伝染するとはどういうことか。強迫症者の最初の暴力に向かい合うと、どうして私たちはそれに反応し、自分も負けまいと思ってしまうのだろう。これは集団が相手の場合も同じだ。私たちを見下し、私たちを「顔のない他者」(faceless Others — W.H.Auden) にしようとする強迫症的な最初の暴力に反応し、私たちは身体的・言語的暴力をふるってしまう。なぜ私たちは最初の暴力に向かい合うとムカツクのか。

この問いに答えてくれるものとして、フロイトの「攻撃衝動」、アードラーの「優越しようとする欲動」、ベルグソンの「動物的生命」、ルネ・ジラルルの「模倣の欲望」などの理論がすぐ思い浮かぶ。これ以外にも私のよく知らない理論があるのだろうが、理論を用いて最初の暴力を説明することはできない。なぜなら、理論もまた最初の暴力に他ならないからだ。理論という最初の暴力によって最初の暴力を説明することはできない。自分で自分の身体を持ち上げることはできない。

理論がなぜ最初の暴力なのかについて述べてみよう。それと同時に、なぜ私たちは最初の暴力に向かい合うとムカツクのか、という疑問にも答えてゆこう。

理論という暴力

強迫症者の作る物語とそうではない者が作る物語に大きな相違はない。それはいずれもしばしば不合理で呪術的なものを含む物語だ。サルズマンはこういう。

人間は、最小限の安全と或る程度の確実さを体験するため、内外から自分に及ぶ力に対抗する自分の力量と技術に関して多くの神話をつくりあげなければならない。そういったテクニクは、人間が自分自身というものを視覚化できる能力をもった皮質を発達させて以来、ずっと用いられてきたものである。このような構造化のうちには自分の宇宙のなかで秩序と一貫性を確かなものにしようという試みが含まれており、それはしばしば非合理的なものであった。そうしたテクニクが固いもので、かつ呪術的の意味をもつとすれば、それは強迫的機制と呼ばれてよいだろう。⁴⁾

4) L.サルズマン『強迫パーソナリティ』、成田義弘、笠原嘉訳、みすず書房、1985、p.30

サルズマンによれば、このような強迫的傾向（＝強迫的機制）の持ち主が強迫症者と診断されるに至るのは、その傾向が極端になり日常生活の維持が困難になるからだ。強迫的傾向があるにも拘わらず、日常生活が曲がりなりに円滑に行われているとき、そのヒトは強迫症者ではない。たとえば、飛行機に乗るときお守りを身につけてゆくヒトは多いだろうし、入学試験の前、神社にお祈りに行くヒトも多いだろう。しかし、彼らを強迫症者と言うことはできない。大半のヒトがそのような物語あるいは神話を作り上げているだろう。強迫症者とそうでない者を分けるのは、その強迫的傾向によって日常生活が維持されているのか、いないのかということだけだ。

サルズマンによれば、強迫症者は次のような特徴をもつ。1) 全知への欲求、2) 疑惑癖、逡巡、そして不決断、3) 尊大性、4) 儀式。

すでに述べたように、呪術的な儀式は程度の差はあれ誰もがもつものだ。それ以外のものはそのまま、理論を構築しようとしている者の特徴として当てはまる。彼は完璧であろうと努めながらも（全知への欲求）自分の理論を疑い検証し（疑惑癖、逡巡、そして不決断）、しかし、自分の理論は他の誰の理論よりも優れていると思う（尊大性）。また、ある程度尊大でなければ、理論を構築することも思いつかないだろう。強迫症者の尊大性について、サルズマンは次のようにいう。

極端に振舞う傾向の重要な結果の一つは、自己への尊大な態度の発展である。これは全知全能を達成しようとする試みに対する彼自身の反応である。おそらく彼は自分自身をひそかに超人だとみなしている。一方で自分が無力で無能だと感じる時ですら、そうである。彼は自分自身を、完全を求めて努力する人間とみなすか、あるいはすでにそれを達成した人間と思い込むがゆえに、尊大な自己像をもつのである。これは自己の才能と能力の現実的評価の結果ではなく、彼が自分に課している高い基準と不可能な要求から生じたものである。何事にせよ最善でないと我慢ができない。そのことが、彼をして他者よりも優れていると感じさせ、「次善」に甘んじる人たちへの傲慢で軽蔑的な態度の原因になることがしばしばある。⁵⁾

強迫症者にとっては「つねに正しいこと」（批判を免れること）は尊大な主張ではない。それに値する人間にとってはもっともな期待だ、と彼は思うのである。自分の高い理想と例外的な基準とはもっぱら最高の賞賛に値するものと感じる。したがって、自分は完全を目指しているから批判を免れるべきだし — 完全が達成できないとしても批判されるべきではない。しかし、通常はそうはいかないので、強迫者は多大な怒りと不平を感じている。自分は人間としての責任を逃れているという主張を伴った尊大性の発展のこのパターンこそ、強迫状態に生じる多くの合併症 — 肥満、嗜癖、盗癖といった — の原因である。⁶⁾

誇張されてはいるが、これは理論家の尊大性そのものだ。精神の失調を除けば、強迫症者と理

5) サルズマン、p.73

6) サルズマン、p.76

論家との類似については誰の目にも明らかだろう。理論を構築しようとする者は、日常生活でいかに平和的であろうと、結局他の理論家を放逐し、読者を自分の理論の支配下に置こうとする。⁷⁾フロイトはアードラーを、アードラーはフロイトを、ジラールはフロイトをそれぞれ排除しながら、読者を自分の理論の支配下に置こうとする。理論家同士が仲良くお互いの理論を認め合うということはないし、彼らが読者を支配しようとする欲望を棄てることもない。これが理論家のもつ最初の暴力なのである。

従って、理論家でありながらも最初の暴力について論じるとすれば、それはレヴィナスのように論じるしかないはずだ。レヴィナスは最初の暴力そのものを無効にするような文体で、私たちの最初の暴力をたえず問題化しながら自分の理論を展開する。⁸⁾

一方、レヴィナスとは逆に、フロイトを始めとする理論家たちが最初の暴力を問題にすることはできない。問題にすれば、彼らの理論そのものが成立しなくなる。いかに彼らが詳細に「攻撃衝動」や「優越しようとする欲動」について論じようと、彼らの理論は他の理論にとって暴力そのものだ。彼らは暴力をふるいながら、暴力とは何かと論じている。それはすでに述べたように、自分で自分の身体を持ち上げようとしているようなものだ。このため、最初の暴力について述べる時、フロイトたちの暴力についての理論を用いることはできない。

ただ、誤解を招かないように付け加えると、私は彼らの理論そのものを否定するわけではない。それでは私自身が彼らに最初の暴力①をふるっていることになる。彼らの理論の中で私が受け入れることができるものは受け入れよう。現に私はこうして中井やサルズマンの理論を一部受け入れている。しかし、このような態度を取り続けられれば、一貫性がないという批判を受けるに違いない。また、それはあらゆるものを受け入れるという日本独特の思想風土、丸山真男のいう「<伝統>思想のズルズルべったりの無関連な潜入」⁹⁾であるという批判を受けるだろう。しかし、受け入れることができるものは受け入れるという姿勢を崩すわけにはゆかない。このような受容性がレヴィナスにおける一貫性なのであり、その姿勢に賛成する私の一貫性である。この受容性と丸山の批判している日本の思想のけじめのなさとは明らかに違うだろう。私が受け入れることができないのは理論のもつ強迫性であり理論そのものではない。丸山の批判している「日本の思想」は、その強迫性も含めて西欧産の理論をケジメなしに丸ごと受け入れるのである。

以上に述べたように、私たちは最初の暴力に接するとなぜムカつくのか、ということフロイトたちの理論を用いて「理論的に」説明することはできない。また、私に理論体系を構築して最初の暴力を「理論的に」説明する能力があるとしても、そんなことをすればフロイトたちと同じように最初の暴力をふるうことになる。従って、今はその理由をドストエフスキーがしばしば描いてい

7) 拙稿、「バフチンのフロイト批判」；『論集・ドストエフスキーと現代 — 研究のプリズム』木下豊房・安藤厚編著、多賀出版、2001、p.351

8) レヴィナスも私と同様「最初の暴力」というが、その意味は若干違っている。レヴィナスのいう< première violence >とはヒトを束ねて論じる暴力のことだ。しかし、ヒトを束ねて論じるということは、結局、私のいう最初の暴力①②のことなのである。(エマニュエル・レヴィナス+フランソワ・ポワリエ『暴力と聖性 — レヴィナスは語る』、内田樹訳、国文社、1991、p.126)

9) 丸山真男『日本の思想』、岩波新書、1961、p.11

る自尊心の病という事態を紹介しながら、比喩的に説明するにとどめる。

嘔と聾の世界

ドストエフスキーによれば、私たちは程度の差はあれ誰もが自尊心の病に囚われている。ドストエフスキーが描いた自尊心の病の中でもっとも知られているのは『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフのものだろう。彼は、自分を貧困に追いこみ、さまざまな人々を苦しめているこの世界に「負けまい」と思い続け、ついには自分が超人だという物語に囚われるようになる。そして、その物語を実現するための闘争資金を作るため、金貸しの老婆を殺し、巻き添えにその妹まで殺してしまう。結局シベリアの監獄に送られた彼は熱病にかかり、こんな夢を見る。

彼は夢を見た。それは、これまで聞いたことも見たこともない何か恐ろしい伝染病のために世界全体が滅んでゆく夢だった。伝染病はアジアの奥地からヨーロッパに広がっていった。数名の、じつに少数の選ばれた人々を除いて、誰もが滅びる運命にあった。新種の旋毛虫のようなものが現れ、この顕微鏡的な存在がヒトの身体に住みついたのである。これは知能と意志を与えられていた。これが身体に入ると、人々はすぐさま何かに憑かれたようになり狂っていった。これまでこの人々ほど、自分が賢明で、真理をつかんでいると思った者はいなかった。この人々ほど、自分の下す判決が正しく、自分の学問的な結論が正しく、自分の信仰や道徳的な判断が正しいと思った者はいなかった。さまざまな村や町に住む人々、さまざまな民族がその旋毛虫に感染し、狂っていった。誰もが逆上し、お互いを理解することができなくなった。誰もが自分ひとりに真理があると思い、他人を見ては胸を叩き、泣きながら手をもみしだいた。誰も誰をどんな風に裁けばよいのか分からず、誰も何が悪で何が善なのかについて同意することができなかった。誰も、誰に罪があり、誰に罪がないのか分からなかった。人々は意味もない悪意に駆られ、互いに殺しあった。¹⁰⁾

こうして人類は旋毛虫のために滅亡してゆく。すでに明らかなように旋毛虫とは私たちの自尊心の病のことだ。ラスコーリニコフのように自尊心の病に囚われているかぎり、レヴィナスがいうような他者は私たちに存在しない。自尊心の病に囚われていても他者はいると思われるかもしれないが、それは私たちにとって他者(=人)ではなく、自己の支配下あるいは延長上にあるべき分身(=ヒト)にすぎない。本稿で私は「人」と「ヒト」をそのように区別して使っている。自尊心の病に囚われた私たちの大半にとって、多かれ少なかれ、ヒトは人ではない部分の方が多い。つまり、私たちの大半はあまり人を人とも思わないのである。このような私たちにとって、分身であるヒトが自分の支配下にないとすれば、それは自分の分身ですらなく、無に近いものだ。無に近いのであるから、それをどのように扱っても許されることになる。ドストエフスキーがラスコーリニコフの夢の中で伝えようとしたのは、このような自尊心の病をもつ者が抱く自己中心的な世界観であった。

10) Ф. М. Достоевский. Полное собрание сочинений, т. 6, изд. Наука, л., 1973, с. 419-420 (邦訳『罪と罰』下巻、工藤精一郎訳、新潮文庫、1987、p.479)

ラスコーリニコフはその世界観から逃れることができないので、他者とのコミュニケーションが困難な「唾と聾の世界」¹¹⁾に自分がいると感じている。程度の差はあれ、これは私たちにしても同様だ。

しかし、すでに述べたことだが¹²⁾、この時期、ドストエフスキーは、自分の病を了解することはできたが、病からどのように抜け出せばよいのかが分からなかった。このため、ドストエフスキーはソーニャを現実感のない女性として描いてしまうし、ラスコーリニコフの宗教的回心も神話的なものになっている。ドストエフスキー自身がようやく自尊心の病から抜け出すのは自分の死が近づいたとき、最後の作品『カラマーゾフの兄弟』を書いていたときだ。彼はこの作品でようやくゾシマやアリオーシャのような自尊心の病から抜け出した人物を描くことができた。彼のそれまでの作品にゾシマやアリオーシャのような自尊心の病から抜け出した人物は登場しない。『未成年』のマカールがいるけれど、小説の脇役にすぎない。こんなことになるのは、ドストエフスキー自身が自尊心の病から抜け出していなかったからだ。作者の経験は作品において反復される。それと同時に、作者の想像力によって変容される。しかし、変容された作者の経験といえども、やはり作者のものなのである。作者は自分の経験の外にある事態を書くことはできない。¹³⁾ このため、自尊心の病から抜け出していなかったドストエフスキーは、そこから抜け出した人物を描くことができなかったのである。

ところで、自尊心の病そのものは旋毛虫によって表されているように、抽象的な或る事態に過ぎない。それがはじめて現実に力をもつのは物語という形をとるときだ。すでに述べたように、物語はふたつの最初の暴力をもつ。自分の物語に固執すると、他のヒトの物語を聞かなくなり、自分の物語を他のヒトに押しつけるようになる。このような最初の暴力が旋毛虫の夢の中で描かれている。ラスコーリニコフの自尊心の病も物語の形をとることによって初めて最初の暴力になる。私たちが最初の暴力にさらされるとムカツクのはこのためだ。自尊心の病から抜け出していない私たちの大半は、自分に最初の暴力を加えようとするヒトに向かい合うと対抗して、最初の暴力を自分も行使しようとする。これがムカツクということなのであり、自尊心の病なのである。このような例を小説からではなく、私たちの生活世界から取り上げてみよう。

二匹の旋毛虫

ロロ・メイは分裂病体験をもつハナ・グリーン¹⁴⁾の自伝小説『デボラの世界』を紹介しながら次のようにいう。

ハナはじつに従順で穏やかだった。怒りを露わにすることはまったくなかった。必要なときはい

11) 新約聖書、マルコ伝9/25: Ф. М. Достоевский, там же, с.90 (邦訳『罪と罰』上巻, p.195)。また、バフチンは「唾と聾の世界」の中での対話について次のようにいう。「ドストエフスキーは、現実においては互いに引き離され、互いに声が聞こえなくなっていた考えや世界観を引き合わせ、議論させたのである」(M.M.Бахтин, Проблемы поэтики Достоевского, Изд.4е, М., 1979, с.104)

12) 拙稿「わが隣人ドストエフスキー—模倣の欲望をめぐって;『論集・ドストエフスキーと現代—研究のプリズム』, pp.399-426

13) 拙稿「誰がドストエフスキーを読むのか」、『大阪経大論集』第45巻第4号、1994、pp.116-121

つも自分の霊界の神話世界に引きこもり、その世界の住人たちと話を交わしていた。ハナを治療していたチェストナットの精神科医フリーダ・フロム＝ライヒマン博士は、彼女の神話を尊重していた。神話が必要なら、それを取り除かなくてもいいのよ、と博士はハナに言っていた。ところが、ひと夏、博士がヨーロッパに出かけたとき、ある若い医師がハナの担当医になった。張り切りすぎた彼は、愚かにも勇気をふりしぼってハナの神話世界を壊してしまった。その結果は悲惨だった。ハナの怒りは爆発し、自分の身体と身の回り品に火をつけ、生涯消えることのない火傷を負ってしまった。その若い医師はその神話世界がハナ自身の生に意味を与えているという事実を受け入れなかった。これが彼の間違いだった。ハナの神話世界が理論的に正しいか正しくないかということが問題なのではなく、神話世界がハナにとってどんな意味をもつかが問題なのだ。このおとなしい、どんな攻撃的な行動も取らないだろうと思われた患者が、とつぜん、おとなしい態度を一変させ徹底的な暴力をふるったのだ。¹⁴⁾

ここでロロ・メイは若い医師の方に非があったと見ている。なぜならハナは治療されるべき患者であり弱者であるだからだ。その若い医師はフリーダ・フロム＝ライヒマン博士のように、ハナの物語に耳を傾けるべきだった。被治療者の物語は何よりも優先されなければならない。多くの精神科医やカウンセラーはそう言うだろう。これは確かにそうだ。ハナが求めているのは人間的なつながりであり、誰かがありのままの自分を、つまり自分の物語をそのまま認めてくれることなのである。ハナのこの誰かとつながろうとする願いを、若い医師は無惨にも踏みにじった。このため、ハナは怒りを爆発させたのだ。

しかし、治療者—被治療者という関係を取り去ってみれば、ここでは二つの物語が衝突していることが明らかになる。その若い医師もハナも、お互いの物語に我慢がならなかったのだ。ここでもラスコーリニコフの夢の中の事態と同じ事態が生じ、治療の場が自尊心をめぐる覇権争いの場に変貌している。ハナは自分の物語をその若い医師に聞かせようとした。ところが、その若い医師はハナの物語に耳を傾けず、自分の物語を患者に聞かせようとした。彼らは二人とも旋毛虫に憑かれた人々のように、相手を見ては、どうしてこんなことが相手には分からないのだろうと「胸を叩き、泣きながら手をもみしだいた」のである。

ここでは最初の暴力①②が二組そろっている。この二組の最初の暴力が治療の場を破壊し、ハナの二次的な暴力を招いたのだ。しかし、フリーダ・フロム＝ライヒマン博士のように、患者の物語を聞いてばかりいるカウンセラーや精神科医の大半は、なぜ最初の暴力①②に耐えられるのか。彼らが自尊心の病から抜け出しているからか。そのような人々もいるだろうが、彼らが耐えられる主な理由は、彼らの職業意識—治療者としての物語が彼らを守っているからだろう。彼らはひそかに治療者としての物語を患者に押しつけながら、最初の暴力②を患者にふるっている。このため彼らは耐えられるのだ。彼らが治療者としての立場を取らないとすれば、彼らは破滅するだろう。このことをもう少し詳しく説明してみよう。ドストエフスキーの作品に戻ろう。

14) Rollo May, *Power and Innocence — A Search for the Sources of Violence*, NY, 1972, P.26

カーニバルではなくスキャンダル

詩人ヨシフ・ブロッキーはあるインタビューの中で、バフチンのカーニバル論について次のようにいう。

バフチンはドストエフスキーの作品に「カーニバル」という言葉を使っていますが、これはまったく間違いですね。私が思うに、それは「スキャンダル」です。スキャンダルであって、カーニバルではありません！このほうがずっと面白い。なるほどドストエフスキーは初期の作品でスキャンダルを描くことはできませんでした。でも、後期の作品では、客間に人が集まり、言葉を交わしたり罵りあったりし始めるんです。¹⁵⁾

ブロッキーの発言は『カラマーゾフの兄弟』を除けば、正鵠を得ている。すでに述べたように、『カラマーゾフの兄弟』以前の作品はポリフォニックなものではなく、モノローグ的な視点の寄せ集めにすぎない。『カラマーゾフの兄弟』以前の作品では自尊心の病に憑かれた人々が自分の物語をモノローグ的に喋るだけだ。彼らは他のヒトの話に耳を傾けない。このため『カラマーゾフの兄弟』以前の作品は最初の暴力にあふれている。¹⁶⁾

その一方で『カラマーゾフの兄弟』以前の作品には、他のヒトの話に耳を傾けてばかりいる人物も登場する。『罪と罰』のソーニャ、『白痴』のムイシュキン公爵、『おとなしい女』のヒロインなどのことだ。ムイシュキン公爵は周囲から押し寄せる最初の暴力①②に耐えきれず発狂する。『おとなしい女』のヒロインは夫による最初の暴力①②に耐えきれず投身自殺する。ソーニャは作者によって理想化されているため、最初の暴力①②に超人的に立ち向かい破滅しない。しかし、その代償として、私たちにとっては現実味のない人物として描かれている。

従って、ドストエフスキーによれば、自尊心の病から抜け出していない者が他のヒトの物語に耳を傾けてばかりいると、最初の暴力①②にさらされつづけ、ついには破滅する。善人は若死にする。結局破滅しないで、周囲から押し寄せる最初の暴力①②に耐え抜くのは『カラマーゾフの兄弟』に登場するゾシマやアリョーシャだけだ。何度もいうが、彼らが破滅しないのは自尊心の病から抜け出しているからだ。

これはカウンセラーや精神科医にしても同様だ。自尊心の病から抜け出していないまま患者の物語に耳を傾けるのであれば、彼らもムイシュキン公爵やおとなしい女のように破滅してゆくしかない。このため、自尊心の病から抜け出していない治療者は、治療者としての物語によって自分を守らなければならない。しかし、ひそかに守らなければならないのであって、表立って守れば、ハナを担当した医者のように患者との闘争関係に入ってしまう、治療は失敗に終わる。

最後に、私たちの生活世界の中から、ムイシュキンやおとなしい女のような例をあげておこう。つまり、自尊心の病から抜け出していないのに、相手の物語に耳を傾けつづけ破滅してゆく例。そ

15) Соломон Волков, Диалоги с Иосифом Бродским, изд. Независимая Газета, М., 1998, с. 174

16) 「わが隣人ドストエフスキー — 模倣の欲望をめぐる」、p.423

の典型的な例はいわゆる共依存関係だろう。共依存関係に陥った者は破滅に突き進む。しかし、共依存関係についてはすでに述べたので¹⁷⁾、ここではもうひとつの典型例、冤罪の被害者のケースを取りあげてみよう。

最初の暴力 — 冤罪

誰かと話をしている、自分は理解されていないな、と感じることは多い。これは長年付き合いしてきた家族や友人とのあいだでもしばしば起きることだ。いや、それはそうではなく、こういうことなんだ、と説明を加えても、結局相手は不審な顔をして黙りこんでしまう。あるいは、こちらの言うことが分からないので、次から次へ質問の矢を浴びせてくる相手もいる。しかし、結果はそう変わらない。説明を重ねれば重ねるほど、誤解が積み重なってゆく。中には「そうだったんですか」と相づちを打ってくれる相手もいるが、これもかえって居心地が悪い。「話せば分かる」というのはフィクションだ。そんなことは私たちの人生で起きはしない。私たちはほとんどの場合、誤解し合ったまま生きる。このような誤解が冤罪では極端な形で現れ、誤解された当人を社会的に破滅に追いやる。

浜田寿美男が紹介する宇和島事件を取りあげよう。浜田の叙述を引用しながら、宇和島事件について簡単に述べておこう。

愛媛県宇和島市の男性Aさんが、B子さん宅の窃盗容疑で警察に任意同行を求められた。AさんはB子さんと十年あまり前から親しくしていて、ふだんから彼女の家に入出入りし、寝泊まりしたり食事をさせてもらっていた。警察に任意同行を求められる五日ほど前、B子さんが通帳と印鑑が見つからないというので、AさんはB子さんと一緒に家の中を捜した。出てこないで、B子さんが預金先の農協に問い合わせたところ、半月以上前に通帳から五十万円が引き出されていた。B子さんは警察に被害届を出した。そしてAさんが警察に任意同行を求められた。

Aさんは身に覚えのないことなので、当然自分の犯行を否定した。しかし、取り調べが始まって四時間後には「はい、私がやりました」と認めてしまう。これは刑事たちに取り囲まれ恫喝を受けたためだ。認めた以上、もう後戻りはできない。Aさんは刑事たちの協力を得ながら自分の犯行についての物語、すなわち自白調書を作り上げる。そして、拘留所で一年あまり暮らすことになる。

ところが、Aさんが起訴されて八ヶ月後、いよいよ罪が確定するという時期になって、隣の高知県に真犯人が現れる。警察が強盗傷害容疑で逮捕された人物の余罪を追及医していたとき、B子さん宅の窃盗について自白したのである。いろいろ調べてみると、その人物がB子さん宅の窃盗犯であることは動かし難い事実だと判明した。Aさんはそのことを知らされないまま、さらに一カ月半拘留されていた。検察から拘留取消申請が出され釈放されたのは、判決予定日の四日前だった。そしてAさんは検察から異例の無罪論告を受けた。¹⁸⁾ なぜこのようなことが起きたのか。浜田はこういう。

17) 拙稿、「愛と自我境界 — ドストエフスキーからレヴィナスへ」、『ドストエフスキイ広場』No9、2000、pp.70-71

18) 浜田寿美男『自白の心理学』、岩波新書、2001、pp.27-33

無実の人がうその自白に落ち、さらにうその犯行ストーリーを語るというのは、心理的にきわめて異常な事態であるように思われている。しかし犯人として決めつけられ、取り調べの場で追い詰められ、決着をつけることを求められたとき、誰もが陥りうる、ある意味で自然な心理過程であることを知っておかなければならない。異常があるとすれば、それは被疑者の心理ではなく、当の被疑者を囲む状況の側の異常なのである。¹⁹⁾

この「当の被疑者を囲む状況の側の異常」は警察の、Aさん以外に犯人はいないという思いこみから始まっている。警察がAさんの身辺を調べてゆくとあちこちに小口の借金があるなど、Aさんが疑わしい人物である情報が集まった。このことを警察から教えられたB子さんはAさんに不信感を抱くようになる。このため、彼女は預金が引き出された農協の防犯カメラに映っていた人物をAさんだと証言してしまう。浜田は次のようにいう。

警察が濃厚に抱いた疑惑は、まるで磁力を帯びた磁場のように周囲の供述証拠を引き寄せ、あるいは歪め、無実者のまわりを有罪証拠で取り囲む。そうして逃れようのないかたちで被疑者を取り調べの場に引きこみ、追及したとき、その同じ磁場がやがて被疑者本人の自白をも引き寄せてくるのである。²⁰⁾

警察が作り上げたAさんが犯人であるという物語に、被害者のB子さんも被疑者のAさんも巻き込まれる。警察の人々はべつに強迫症者ではない。健常者と呼ぶべきヒトの方が多くに違いない。しかし、そのような健常者が同調者を多くもてばもつほど、その物語の最初の暴力①②は私たちが破滅させる危険なものになる。私たちは自分を守る手段をもたないムィシュキンのように健常者の最初の暴力にさらされつづける。

イジメなどに見られるように、同じ物語を共有する人々が多くなればなるほど、その物語を共有しない人々に対する最初の暴力はいつそう激しいものになる。浜田寿美男が冤罪の原因として指摘している刑事たちによるAさんに対する同調圧力の背後には、刑事たちとその物語を共有する警察とその警察を支える地方都市の人々の同調圧力を見なければならぬ。宇和島のような地方都市で警察の作る物語に同調しないということは、自分だけではなく親戚縁者までもが生き難くなるということを意味する。このふたつの同調圧力におののき、Aさんと、そしてB子さんも警察の作りあげた物語に同調したのである。そして、Aさんは犯罪者の烙印を押され、社会的に破滅する直前まで追いこまれた。

しかし、浜田はとくに述べていないが、私に関心をもつのはAさんの精神状態だ。たしかに冤罪によって社会的に葬られるというのはAさんにとって深刻な出来事だっただろう。しかし、それ以上に深刻だったのは、Aさんの精神状態ではないのだろうか。彼は自ら選んだわけでもないのに、ムィシュキン公爵のように回りの人々の物語に耳を傾けつづけなければならない窮地に追いこまれた。

19) 浜田、p.48

20) 浜田、p.37

真犯人が早々と現れたからよかったものの、もしそうでなかったら、Aさんはムィシュキンと同じように回りの最初の暴力①②にさらされつづけ、精神的な破滅に追いこまれていたのではないだろうか。そうなれば、冤罪だと判明しても、それはすでに精神的に破滅したAさんにとっては無意味なことになっていただろう。

おわりに

以上で物語のもつ暴力性について述べるのは終わるが、この問題はドストエフスキーがラスコーリニコフの夢の中で描いたように、自尊心の病から抜け出せない私たちにとって永遠に担わなければならない課題だろう。しかし、少なくとも私たちが物語のもつ暴力性について毎日の生活の中で少しずつ気づいてゆくとき、物語は暴力としての力を失ってゆくはずだ。そのとき、物語はどのようなものに変貌してゆくのか。物語は暴力性を失うと同時に私たちを癒す力も失ってゆくものになるのか。この疑問にはいずれ改めて答えなければならない。

You name it therapy, but I name it violence

— The first violence of narratives —

Shunji HAGIHARA

In narratives I include literary works, theoretical works, our daily gossips or chats, songs, the stories produced jointly by counselors and their clients, among others. From my point of view, narratives have two aspects. On the one hand, as is well known, narratives work as therapy: we may become healed or happy when we hear songs, when we read literary works, when we come to know theoretical works, and when we receive narratives from therapists. On the other hand, though we pay little attention to this aspect, narratives work as 'the first violence'. It means that if we adhere to our narratives, we are inclined not to listen to others' narratives and, thereby, tend to impose our own on them. As a result, people whose narratives are not listened to and who are forced to accept another narrative, will be frustrated and use on others 'second violence', namely physical or verbal violence. Why do we become frustrated? It is because, according to Dostoevsky, each of us has 'disease of pride.' He has described it in almost all of his works. The best known passage of them is Rakolnikov's dream in the epilogue of 'Crime and punishment', where 'disease of pride' is described as infectious parasites. In this paper, I have chosen as examples of 'disease of pride' the narratives of compulsive persons; those of theorists such as Freud, Jung, Adler, Bergson, Girard and so on; and those of the police force which impose false crimes on suspects. Such narratives are 'the first violence' that invokes 'second violence', the worst of which is war.